

---

# ポケットモンスター(憑依)

kage

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ポケットモンスター（憑依）

### 【Nコード】

N8982Z

### 【作者名】

k a g e

### 【あらすじ】

主人公がポケモン世界の子供に憑依して、俺TUEEEとかハレムやるうとした結果がこれだよ

## ポケットモンスター（憑依） 1

ポケットモンスター（憑依） 1

### 0：早朝の邂逅

ミズハは目覚まし時計が鳴り響く前に目覚めた。時刻は六時少し前。欠伸交じりにベッドから起き上がると、布団の中に不自然な膨らみが出来ている。布団を捲って見ると彼女の大切なパートナーであるピカチュウの『リン』がすやすやと眠っていた。その安心しきった寝顔を見てミズハは小さく微笑んでいると、リンが身じろいで目を覚ます。

「おはよう、リン」

寝ぼけたような声でリンが鳴いて、名残惜しそうにベッドから出て行く。ミズハもベッドから起き上がり目覚まし時計のアラームを解除してから、自室を出る。階下に降りて洗面所へ向かう。その途中にある台所にはすでに起床していた母が朝食の準備をしている。三つ編みが鼻歌と共に背中中で小刻みに揺れている。

「おはよう、ママ」

「おはよう、ミズハ、リンちゃん」

母が振り返って笑顔で挨拶を返す。自室から付いてきたリンも一声鳴いた。洗面所に向かう。鏡には母と同じ赤毛が好き放題に寝癖

を作っていた。先に顔を洗って歯を磨く。それから寝癖を整えてから再び自室に戻る。寝巻きからトレーニングウェアに着替え、リンを伴って外に出る。

空は雲一つない晴天が広がっている。若干の肌寒さを覚えながらストレッチで固まった筋肉を解し、ゆつくりと走り出す。早朝の新鮮な空気を肺に入れるたびに、内側から綺麗になっていくようだ。人以上の体力を持つリンはミズハのペースに合わせて、斜め後ろから追従してくる。

今では日課になった早朝のランニングを始めたのは、ミズハがトレーナースクールに入学してからだ。トレーナーにはポケモンの知識、バトルでの戦術と多くのことを学ばなければならないが、何をすることも体力が一番必要なものであると教えられた。そこでこのジョギングを毎日の日課に取り入れた。

それから丁度一年が経ったが、ほとんどサボらずに走り続けた。そのお陰かどうか分からないが、実践訓練では一度も根を上げたことは無い。それに最初と比べると大分楽に走れるようになった。少なからず体力は一年前よりも向上していると確信できる。何よりも小さなことではあるが、それを続けることが大事だと思っている。

ただ体力に余裕が出てくると、見慣れた景色の中を走るのが少し苦になる。そこで今日はいつものコースから外れてみた。ただし今日は春休みを明けての始業式があるので、あまり遠くに行き過ぎて遅刻しては目も当てられない。頭の中で時間を計算しながら走っていると、ふと、視界に見覚えのある少年が現れた。

少年の名前はサイガ。目の冴える様な金髪に、同年代にしては鋭い目付き。

ミズ八が今もつとも嫌悪する人間である。

彼はミズ八の同期で、トレーナースクールでは悪い意味で有名な生徒だ。入学式に見かけた時は今ほど目付きは悪くなく、ただ活発な少年だった覚えがある。一年の時は別のクラスだったので人伝いに聞いたのだが、彼はかなり乱暴にポケモンを扱うのだ。実践訓練特にトレーナー戦で負けると八つ当たり気味にポケモンに暴力を振るうらしい。

何度注意しても横暴な行為を繰り返すため、一時期は退学の話も持ち上がったらしい。ミズ八も何度かサイガが暴行を加えている所に出くわし、力づくで止めたこともある。その際に何故そのような行為をするのか問い質した事があるが、呆れ果てるような答えが返ってきた。

自分が実践訓練でいつも負けているのは、ポケモンが弱いからだと。強いポケモンがいれば負けないと。

全く答えになっていないが、要するにサイガは自分のトレーナーとしての無能さを棚上げして苛立ちをポケモンにぶつけているのだ。さらに彼は言うに事欠いて、自分のポケモンなのだからどうしようが俺の勝手だとほざいた。聞き終えると同時に、右ストレートをサイガの顔面に繰り出していた。綺麗に決まった。

同期にはサイガほどではないが、トレーナーというものを勘違いしている人間がいる。そもそもトレーナースクールはこの世界で共存するポケモンとの相互理解を第一の目的としている。そのためにトレーナーとしてポケモンを育てるのだ。日々行われている実践訓練は野生のポケモンに襲われた際の自衛の手段を磨くため、決し

て戦いに勝ってトレーナーとしての強さを誇示する事が目的ではない。

それを理解していない生徒は思いの外多く、彼の場合は特にそれが顕著だ。

右ストレートを放った日はミスハも処罰を受けてしまったが、さほど気にはしていない。ああいう人間はポケモンが受けている痛みを思い知るべきなのだ。ポケモン達だって自分たちと同じように生きていくし、感情だってあるのだ。リンも訓練で傷付けば痛みで苦しむ、褒めれば喜ぶのだ。

その日以降表立ってサイガの横暴な行為は減ったが、それでもポケモンに対する認識は変わっていないようだ。どうしてそこまで強さを求めるのか知らないし興味も無いが、まるでポケモンを道具のように扱う彼の考えは到底許せるものではない。もしまた同じ事を繰り返すようなら、彼のポケモンの為にも容赦はしないと心に決めている。

そして今、目の前でその人物が歩いている。側にはパートナーであるロコンが俯き加減で付いてきている。弱弱しくサイガの後を付いていく姿を見ただけで怒りが込み上げてくるが、それを抑えて何をしているのか様子を窺ってみる。

歩いているように見える。いや、歩いているのだからそう見えて当然なのだが。ミスハが見守る中、サイガはそのまま曲がり角へ消えていく。何をしているのか分からないが、とりあえず後を追っていく。曲がり角の先には先ほどと変わらない歩調でサイガが歩いていた。一体こいつはこんな早朝から何をしているんだ。

「サイガ」

逡巡したが声を掛けることにした。距離は離れていたが十分な声量だったはずだ。しかしサイガは振り向かず歩いている。側にいるロコンは気付いた様子で振り返るが、困ったように主の少年とミズ八を交互に見ていた。

「ちょっと、無視するなんていい度胸じゃない」

「……」

もう一度声を掛けると、今度は立ち止まって振り返る。以前よりも鋭さを増した目付きがミズ八を射抜くが、しかし今更そんなものでは動じない。側にいるリンはサイガに対して敵意の籠もった視線を向けて、低い声で鳴きながら警戒している。

「あなた、こんな朝っぱらから何してんの？」

「……」

サイガは沈黙を通してている。その態度に不審なものを覚える。確かにミズ八とサイガの仲は険悪なものであり、露骨に無視することもあるだろうが、しかしそれにしても何か違う気がする。此方が内心戸惑っていると、おもむろにサイガが口を開く。

「散歩」

「……はあ？」

予想の斜め上の答えに、思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。

憎まれ口か何かを言われると思っていただけに、まともな返答がくるとは思わなかった。いや、それよりも。サンポって散歩のことか？ 外をのんびり歩くこと？ ロコンを連れて？

「……あんたが？」

「あんたが、と言われても意味が分からない」

まただ。また普通に、しかも常識的な返事が返ってきた。違和感を覚える。しかし今はそれを飲み込んで再度聞き返す。

「あんたが、こんな早朝からロコンを連れて散歩してることよ。どうせまた下らない事でも考えてるんでしょ！」

これが仲の良い友達だったら何の問題も無い。そうでなくてもポケモンを連れて散歩をする人は結構多いのだ。しかし目の前にいる人間は違う。あれだけポケモンを道具のように見てきたサイガが、今更このような事をする人間とは思えない。だから人差し指を突き出して否定的に声を上げる。

しかし当の本人は困惑したように眉を顰める。

「俺がロコンを連れて散歩して、何がおかしい？ 見たところ、君もピカチュウを連れてジョギングをしているように見える。俺がおかしいのなら、それは君も同じ事だ。俺が何か間違っていることをしているなら謝るが、別にそういうわけでもないだろう」

「う……。そう、だけど……」

畳み掛けるように言われて口籠る。何か反論したいところだが、



先ほどから感じている違和感が喉に詰まって何も言えなくなる。お互いに口を閉ざしたので、自然と睨み合う形になる。今思えば、此方が一方的に睨んでいただけの様な気もするが。どちらにせよ、サイガはふいに背を向けて歩き出した。

「ちょ、ちよつと。どこ行くのよ？」

「家に戻る。それとも、君は俺にまだ何か用があるのか？」

首だけ此方に向けてサイガが尋ね返してくる。今まで何とも感じなかった鋭い目付きに初めて気圧されて、言葉が詰まる。それでも何か言おうと思ったが、膨れ上がる違和感がそれを堰き止める。

「……ロコン、行くぞ」

結局何も言えず、サイガはミズハに背を向けて去っていった。ロコンは困ったように此方を見ていたが、やがて離れていく主の元へ行ってしまった。ミズハは彼の背が見えなくなるまで、そこで立ち尽くしていた。

リンが困惑したように鳴いて、ミズハはようやく我に返った。

## 1：始業式

春の麗らかな日差しがやんわりと降り注ぐ中、生徒たちがポケモンスクールの校門に吸い込まれるように登校していく。短い春休みであったが、ほとんどの生徒は久しぶりに会う友達と会話を楽しんでいる。中には新学期に向けてイメージチェンジをしている生徒や

この陽気に当てられて無為にテンションの高い生徒も見受けられるが、それを含めて校内は活気に溢れていた。

ミズハもその例に漏れず、春休みで会えなかった友人であるモエとお喋りに興じていた。校門から生徒の流れに合わせて歩く先には掲示板があり、そこには多くの生徒たちで人だかりが出来ていた。掲示板には新学期のクラス編成が貼られている。自分がどのクラスに所属しているのか確認するべく、友人と共に人だかりに混ざる。

すぐに自分の名前を見つけたらしいモエがのんびりとした歓声を上げる。

「わー、今年もミズハちゃんと同じクラスだー。やったー」

友人に自分がどのクラスなのか教えてもらう。そこには確かにミズハとモエの名前が記されていた。他にはどんな生徒の名前が載っているか適当に名前を追っていくと、ある名前に視線が止まった。その様子に気付いたモエが不思議そうに尋ねてくる。

「どうしたのー、ミズハちゃん？」

「……嫌な奴の名前を見つけちゃってね」

サイガ。

去年は別のクラスであったが、今年と同じクラスに編成されている。暴力沙汰以降、サイガとミズハが険悪の仲なのは周知の事実である。にも関わらず同じクラスに編集したのは、恐らくミズハの存在がサイガの横暴な行為を抑止しているからだろう。事実、それ以降サイガが表立って口コンに暴力を振るう頻度は落ちている。

しかしこれで問題が解決した訳ではない。喻えるなら、爆発する事が確定している不発弾のようなものだ。事情を知っている人間から見れば、近い将来問題が起きるであろう事は目に見えている。このクラスを担任する教師には胃が痛む話だ。

「あー、そっかー。ミスハちゃんってサイガくんのこと嫌いだもんねー」

モエがまるで他人事のように言う。一応彼女なりにミスハを心配しているのだが、その間延びした口調の所為で他人から勘違いされがちだ。それを理解しているミスハは曖昧とした笑みを浮かべた。

確かに彼女の言う通り、自分はサイガの事を嫌悪している。そう自覚すると、脳裏に今朝の出来事が浮かぶ。感じていた違和感は今も胸の内にしこりとして残っている。

最後に会った時と比べると口調ががらりと変わっていた。それに伴ってサイガ自身が常に放っていた剣呑とした雰囲気も随分と、いやほとんど感じられなかった。彼を知っている人間なら誰でも気付けるようなことだ。

しかしミスハが感じている違和感はそのようではない。もっと根本的なところに違和感があるのだ。それが何なのか分からず、またどうして嫌悪する相手の事を深く考えなければならぬのかと、やり場の無い苛立ちが込み上げてくる。それが表面に出てきたようでもモエが怖がっている事に気付く。

思考を丸ごと投げ、友人を促して教室に向かった。

「校長せんせいのお話、長かったねー。わたし、疲れちゃったー」

「ほんと。やってられないわね……」

始業式が終わり、生徒たちが各々のクラスに集まる。モエが相変わらず間伸びた口調で、心底辟易したように愚痴る。全く持つて同感だ。他の生徒もみな同じような感想を抱いているのだろう、疲れたような、あるいは開放感に浸っている表情を浮かべている。

思っのだが、始業式というのは校長の無駄に長い話を聞くためだけにあるのだろうか。そう勘違いしてしまいそうなくらい、始業式での校長の話は長かった。それも一時間くらい起立した状態で聞いていたのである意味拷問だ。

よくまあ途中で倒れる生徒がいなかったものだ。普段の訓練で鍛えているお陰だろうが、今はその体力が恨めしい。不謹慎な考えだが、誰か一人くらい倒れればあの校長も自分の行いがいかに凶悪なものであるか省みるだろうに。そう言えば去年の入学式にはパイプ椅子が用意されていた。今年も既に前日に新入生だけで式は終わっている。

もしかしてアレは在学生に対してわざとやっているのではないか。そんな疑問を持ちながら今年一年間お世話になる教室に入ると、モエが何かに気付いたように小さく声を上げた。

どうしたのだろうかと理由を尋ねなくとも、すぐにミズハも気付

いた。教室の一番隅の席、始業式が始まる前まではぽっかりと空いていた場所に今朝見た時と変わらない、目の冴えるような金髪の少年が座っていたのだ。

サイガだ。腕を組んで目瞑っている。周りの生徒も彼に気付いてひそひそと話しているが、まるで気に掛ける様子は無い。しかし始業式をサボっておいと、まるで気にしていない態度にはさすがに苛立ちが募る。何か一つ文句でも言おうと、ミズハはモエの制止を振り切り彼の元へ近付く。

「始業式をサボっというて、随分と堂々としてるわね？」

「……」

不発弾が今まさに爆発しようとしている様子に、周りの生徒が心配そうに見守っている。ミズハのすぐ側でモエがおろおろとした様子でいるのを横目に、ミズハはサイガを睨み付ける。居た堪れない沈黙の中、やがてサイガがゆっくりと瞼を持ち上げ此方に視線を向けた。

それからサイガは少し驚いたような表情で、まるで場違いなことを言い出す。

「君は、今朝の。そうか、同じクラスだったのか」

「……何言ってるのよ、あんた。今朝もそうだったけど、何か変じやない？ 喋り方もおかしいし、頭でも打った？」

喧嘩腰のミズハの言葉に反応せず、サイガはゆっくりと腕組みを解く。鋭い目付きはミズハを射抜いたままで、そこで彼女は気付く。

そこには以前までであった狂気にも似た暗い光が無かった。

「始業式に出席しなかったのは、悪いと思っっている。あとこの口調がおかしいと言われても、今更直す気は無い。我慢してくれ」

淡々と答えるサイガの言葉に、内心で身構えていたミズハは毒気を抜かれた。彼が変わったことは今朝のやり取りで知っているから、驚きは少ない。しかしそれを知らない他の生徒たちは大層驚いていた。サイガの人となりは校内では知れ渡っているから、驚きは一入だ。皆何か得体の知れない生物を見たかのように、呆気に取られている。

側にいるモエも例外に漏れず、目を丸くしている。ミズハの背に隠れて確認するかのように、恐る恐る尋ねる。

「……えーと。サイガくん、だよなー？」

「そうだ。俺の名前は、サイガだ」

外国語を訳したように答えるサイガ。その時、ミズハは彼が自分に言い聞かせるように名乗ったように思えた。それが違和感を刺激する。他にも不自然な部分があった。自分の口調を今更と言っていた。ミズハの知る限り、サイガはもつと乱暴な言葉遣いだっただけだ。だと言っのに昔から今の口調だったかのように、彼は当然のように答えた。

サイガの変わり様は心を入れ替えたとか、そういうレベルではない。人格が別の人間とそっくり入れ替わったとしか思えない。冗談でそんな事を考えてみたが、しかし。ミズハが抱いている違和感の答えがそこにあるように思えてならなかった。教室全体が狐につま

まれた空気の中、それを破るかのように第三者が教室にやってきた。「何をしている？」

ドアが開く音がして振り返るとこのクラス担任するマモリが、腰まで伸ばした黒髪を揺らして入ってきた。マモリは教室の不自然な空気に首を僅かに傾げて、生徒の視線の先にいるサイガとミス八を見つけて納得したように頷いた。口を開くと凜とした声音が教室に響いた。

「これからホームルームを始める。全員席に着け」

マリモの指示を受けて立ち尽くしていた生徒はそれぞれの席に向かう。ミス八とモエもサイガの元を離れ、自分の席に着く。最初から席にいるサイガは視線の先をマリモの方へと向けていた。

それから行われたホームルームは短い時間で終わった。始業式の日には授業を行わず午前中で終わる予定なので、ホームルームが終わると解散になった。しかしサイガだけはマモリから個人的に呼び出しを受けて教室から去っていった。恐らく始業式に出席しなかった理由を問い質すのだろう。

マモリの後を付いて行くサイガの後姿を見ながら、ミス八は胸の内にあるしこりが増しているのを感じた。

2：生徒指導室にて

「遅刻した理由は？」

「道に、いえ。……寝坊しました」

「嘘を吐くな。正直に答えろ」

下校している生徒たちの賑やかさを遠くに感じながら、マモリは呼び出したサイガと生徒指導室にいた。小さな机を挟んでサイガが座ったのを確認し、開口一番にマモリが遅刻した理由を尋ねる。サイガは何か言いかけ、それらしい理由をでっち上げた。マモリはそれが嘘であることは分かっている。

始業式が始まる直前にサイガがまだ登校していない事を確認していたマリモは彼の家に電話をしていたのだ。母親が言うにはもう一時間前には家を出たはずだと言っていた。しかし実際にサイガは未だに登校していなかった。始業式が終わってから、他の職員から彼が今しがた登校してきたと聞いた。

つまりサイガは家を出てから軽く見積もって二時間以上掛けてスクールに来たのだ。さすがにこれは担任として見逃すわけにはいかない。特に彼は問題のある生徒で厳しく目を付けられている。にも関わらず新学期早々、このように身勝手に振舞われると此方としても困るのだ。

だからマモリはサイガの言葉を述べも無く切り捨て、事実を聞き出す。庇う方にしても正確に事実を知っておかなければ、どうしようもならない。

「家に電話を入れて、お前が朝早く家を出たのは確認している。二時間以上もどこで油を売っていた？」



「……」

「答える」

マモリの威圧感の籠もった追及に黙り込むサイガ。本来ならこんな尋問紛いの事を生徒にするのは非常に心苦しいのだが、しかしそうも言っていられないのだ。サイガはトレーナーとして不適正で一度退学に追い込まれている。それ以降も事ある度に何度かその話が持ち上がっている。

その度にマモリが周りの職員を説得してきたのだ。確かにサイガはトレーナーとしては不適正かも知れないが、このまま彼を見捨てることは正しい判断ではないからだ。生徒の間違えを正すのは私たち教員の役目である。それをスクールの体裁を守るためだけにサイガを爪弾きにしては、一体誰が彼を導くというのか。

サイガをどのクラスに編成するか揉めている時、マモリが率先して彼を引き受けた。その際犬猿の仲であるミズ八を抑止力として巻き込んだのは申し訳ないと思っっているが、しかし自分ひとりで出来る事はたかが知れているのだ。周囲にいる教員は頼りにならない事実と、また大層なことを言っつても何も出来ない自分に歯がゆさを感じているが、それでも彼の間違いを正すためだ。

だからマモリは大人気ないと分かっついても、徹底的に嫌われ役を演じるつもりでいた。しかし、その決意が必要ないことをマモリは早々に理解することになった。

「道に、迷っていました」

「……何？」

おもむろに口を開いたサイガの言葉に、マモリは眉を寄せた。募る感情を抑えて、マモリはさらに声を低くして再度問い質す。言外に巫山戯るなと含めて。

「よく聞こえなかった。もう一度言ってみろ」

「道に迷っていたので、遅刻してしまいました」

「……巫山戯ているのか？ 一年も通つてきておいて今更道に迷つて遅刻したと、本気で言い張るつもりか」

そう尋ねるマモリの鬼気迫る気迫は大の大人でも怯えてしまう様なもので、それがまだ子供であるサイガに向けられている。しかし彼は顔色一つ変えずに、頷いて肯定してみせた。正直に言えと言ったから、本当の事を言ったという強気な態度にさすがのマモリも鼻白んでしまう。

しばらく無言でサイガを観察する。特に動揺している様子もなく、汗ひとつ掻いていない。呼吸も安定しているし、視線は不自然に泳がない。教員と二人きりだと言うのに、至極落ち着いた様子でそこにいる彼は嘘を言っていないと理解した。もしこれで嘘だとしたら、大した胆力だ。

しかしそうになると、サイガは本当に道に迷っていたという事になる。しかも、二時間以上もだ。それは余りにもおかしいだろう。転校したばかりだとしても苦しい言い訳だし、そも彼は一年もここに通っている。なのに今更道に迷うとは、何事か。

恐らくサイガはまだ何かを隠している。マモリも彼と少し会話し

て、以前と様子が変わっている事には既に気付いている。その大きな理由はそこにあり、今回の事もそれと関係していると睨んでいる。だからマモリは回りくどいことはせず、直接尋ねた。

「何を、隠している」

「……」

返ってきたのは、沈黙。

先ほどまではスラスラと答えていたサイガは、口を閉ざして答える事を拒絶した。そしてその年の子供にしては歪な目付きには、同年代の子供が宿すには早過ぎる諦観の光が滲み出ていた。恐らくどれだけ凄んだ所で、サイガは決して語ることはない。そう思わせる有様だった。

そしてマモリも無理に聞くことはしなかった。今回は不自然な遅刻の理由を明らかにするために呼び出したのであって、それも一応達成された。だからこれ以上踏み込むことは出来ない。マモリは頑なに口を閉ざすサイガを一瞥し、わざとらしく溜め息を吐いてみせた。

「……遅刻した理由については、だいたい分かった。それで、明日からは大丈夫だろうな。まだ地理を把握できていないようなら、親御さんに頼んで一緒に付いて来て貰ったらどうだ？ それとも私が直接迎えに行つてやるうか？」

「いえ、大丈夫です。道は覚えましたから、一人で問題ありません」

サイガの言い分を完全に信用した訳ではないが、これ以上の問答

は無駄だろう。皮肉交じりに尋ねるマモリの言葉に、彼は眉一つ動かさずに答える。本当に変わり果てたサイガに、マモリは戸惑いよりも空しさを覚えた。それからサイガを帰そうとして、マモリは一つ確認しておきたい事を思い出した。

「お前のポケモンを見せてみる」

「……ポケモン、ですか？」

「そうだ。確かお前が所持しているポケモンはロコンだったな」

サイガはしばしば手持ちのポケモンに暴行を加えることがあった。確かにサイガは別人のように変わった。しかしそれでも一応この休みの間にそういった類の事をしていないか確認しておきたかったのだ。しかし彼は予想外の答えを返す。

「連れてきていません」

「何？」

「今日は始業式だけだと聞いていたので、ロコンは連れて来ませんでした」

「……お前な。常日頃からポケモンを連れて歩けと教わらなかったのか」

サイガの言葉にマモリは呆れたように溜め息を吐いた。『すみません。以後気をつけます』と頭を下げた。その様子にマモリはますます空しさを覚える。何があったのかは分からないが、一人で勝手にまともな人間に更生してくれたようだ。この様子だとポケモンに

暴行は加えていないだろう。自然とそう思えた。

喜ばしい事実なのだが、しかし自分の努力や意気込みがまるで意味の無い事だったように思えて、空しくなる。しかしマモリは努めてそれを外に出さないようにする。

「分かった、もういいぞ。気を付けて帰れよ」

「失礼します」

サイガが頭を下げて部屋から出て行くのを見送って、マモリは深々と溜め息を吐いた。

### 3：変化

ロコンは戸惑っていた。

昨日から、主であるサイガの様子が変わったからだ。変わったというには余りにも劇的で、豹変と言った方が正しい。何がどのように変化したのか考えると、枚挙に暇が無い。まず必要が無い限りサイガはモンスターボールからロコンを出さなかったのに、もうかれこれ一日以上もボールの中に戻っていない。

今まで呼び出された時の状況はほとんどがバトルで、それ以外は食事だけであった。サイガから見ればそれで十分なのだろうが、しかしロコンには堪ったものではない。普段からあの息苦しい空間に閉じ込められて、一度外に出れば羽を伸ばす暇も無くバトルだ。そして一番嫌なのはバトルで負けた後に待っている暴力だった。

ロコンは通常の種と比べると体は小さい方で、バトルは苦手だ。だからバトルで勝てた記憶はあまり無い。そして最強のトレーナーを目指しているサイガにとって負けることは許されないことで、バトルで傷付いたロコンに容赦なく怒りをぶつけてくる。最近はその頻度が落ちたとはいえ、ストレスのはけ口にされているには変わりなかった。

自由に外を謳歌したいと願って止まないロコンであるが、外に出ると暴力が待っている。体はサイガの恐怖をすっかり覚えてしまい、今では息苦しいと感じていたボールの中が心を落ち着ける場所であった。ボールの中に入れば暴行を受けずに済むというのだから、とんだ皮肉話だ。

だからこうして外にしていると不思議と落ち着かない。仮初めとは言えそれほど望んでいた自由であるのに。家の中なら自由に行動していらしくサイガの自室の扉は開放されているが、ロコンはベッド下の薄間の中でじつと縮こまっていた。うつすらと埃が溜まっているが、気になるほどではない。

同じ理由でここよりもさらに広い外の空間を散歩するのも、あまり落ち着かない。今朝方、サイガに連れられて外を歩き回った。散歩なんて彼と出会った頃に数回しただけで、ここ一年近くはしていなかった。久しぶりにサイガと散歩して楽しい、という感情は浮かばない。それよりも一体何をされるのかという恐怖と、外の広すぎる空間に不安しか感じられなかった。

まあもつとも。本当にただの散歩だったので何もされることは無かった。しかしそうした行為もまた、以前のサイガでは考えられないことだった。他にもまだ細かい変化があるが、総じて言える事は

彼がまるで別人のように変わったのだ。気味が悪いくらいに。

もちろんロコンとしても暴力は受けたくないし、良い方向に変わってくれるのなら大歓迎だ。ただその変化が余りにも急過ぎて、戸惑ってしまうのだ。そうしてベッドの下で息を殺して潜んでいるロコンの両耳がピクリと反応した。その直後、家の玄関の戸が開いてサイガが帰ってきた。

そう言えば、こうして別行動するのも以前にはなかったことだ。いつもモンスターボールから出ればそこにはサイガがいて、怖かった。

「……？」

ベッド下の隙間からサイガが自室に入ってくるのが見えた。思わず石造のように身を硬くして息を潜める。しばらくその場で立ち尽くしていた彼は何か荷物を置いて部屋から出て行く。それから家中を行ったり来たりしているのが足音で分かった。何となくその理由を察したロコンだが、しかしその場から動けずにいた。

「……どこに行った？」

やがて自室に戻ってきたサイガがそう呟いた。やはり彼は自分を探していたのだ。ロコンはしばし迷ってから、ベッド下から出てきた。このまま見つかるまで隠れていたなら何をされるか分からないという恐怖が多分にあったが、サイガの言葉に僅かながら心配するよきな声色が混じっていたように思えたからだ。

恐る恐る頭を出してサイガを見上げると、恐ろしいくらいに鋭い目付きがロコンを見下ろしていた。その鋭さに思わずまたベッド下

に引っ込んでしまおう。

「そこにいたのか。出て来い」

怒らせてしまったのだろうか。有無を言わさないサイガの言葉にロコンは諦めたようにベッド下から這いずり出てくる。なるべくサイガの顔を見ないようにしていると、ゆっくり彼がしゃがみ込むのが分かった。それから手を上げた気配がして、ロコンは反射的に身を硬くした。

しかし想像していた痛みはやってこなかった。小さな手の平がロコンの毛に付いた埃を軽く叩いていく。少し乱暴であるが、その優しい手付きにロコンは戸惑いを強くする。

「ベッド下は、掃除しないといけないな」

やれやれといった様子でサイガが呟いた。ロコンは目を丸くしてサイガを見上げる。相変わらず鋭い目付きと、能面のような表情がそこにあるだけだった。

埃をすべて払い落とすと、サイガはロコンにベッド下に入らないように言いつけて自室を出て行く。それからすぐに清掃道具を手にして戻ってきたサイガは早速自分の言葉を実行した。五分ほどで掃除を終えた後、彼は一度自室を見渡す。このまま部屋を掃除するかどうか迷っていたようだが、今日はベッド下の掃除だけで終わらせるようで清掃道具を片付けてしまった。

その間、ロコンは自室の隅で呆けた様に立ち尽くしていた。

それから戻ってきたサイガは勉強机に座ると、鞆からビニール袋



を取り出した。さらにそこから一冊の本を取り出すと、パラパラと斜め読みしていく。『マンキーでも分かる、オーキド博士のポケモン講座!』とタイトルが表紙に載っていた。それを真剣に読んでいるサイガの横顔を見詰めて、常に張り詰めていた空気が消え失せている事に気付いた。

それでも以前と同じ近寄り難い空気を身に纏っている事には変わりなかった。悪い意味ではないが、決して良い意味でもない。

「散歩に行くか」

ずっと見ていた事を散歩を催促していると勘違いしたのか、サイガが口コンにそう呟いた。サイガは本を閉じて自室を出て行く。口コンもその後を黙って付いていく。

主の心情にどんな変化があったのかは分からない。その辺りを含めても気味の悪さを感じるが、しかし今の方がずっとマシである事は確かだ。

この変化が一時のものでない事を、今はただ願うばかりだった。

3・5：考察とこれから

まだ数日しか経っていないが、それでもサイガという少年が碌でもない性格をしていたのは分かった。

この歳で友達と呼べる人物はるくにおらず、周りからは一定の距離を置かれている。あの赤髪の少女（確かミズハといったか）はそ

うではないようだが、どちらにしても良好な関係ではないようだ。彼に強い嫌悪感を持っているのが明白だ。

側にいるポケモン、ロコンの目には恐怖の光がある。一見すると分かりにくいだが、体には人為的な傷跡があった。それがサイガという少年によるものだろうと当たりを付けた。

少しだけ記憶を辿ってみる。脳に直接映像が浮かぶそれは、精神的にかなりきついのであまりやりたくないが、少しでもサイガという少年を理解するためには必要なことだ。彼の記憶を引き出し、それをゆつくり自分の記憶と統合させる。結果、ここ一週間近くの記憶を引き出せた。すべてを知るには全く足りないが、たったそれだけの時間でも大粒の汗が止め処も無く頬を伝っている。

今はこれで限界だが、焦る必要も無いだろう。少しずつ理解していけばいい。それで引き出した記憶には、ロコんに暴行を加えているものがあつた。やはりこの子の傷はサイガによるものだった。それとここ一週間近く野生のポケモン相手はかなり無茶なバトルを繰り返していたようだ。

その行動の根底には、強さへの渴望があつた。誰よりも強くなりたいという、狂気に近い想い。その理由を知るにはもつと記憶を思い出さなければいけないようだが、とりあえずそれが要因でサイガという少年が歪んでしまったのは分かつた。理由にしてもほんやりと曖昧だが、察せないこともない。

自分がトレーナーとして弱い理由をポケモンに押し付けている考えから、サイガの精神が余りにも幼かつたのが全ての原因だろう。だが彼を責めるのも酷と言うものだ。まだ十にも満たない子供なのだから、道を間違えて当然だ。俺自身だって彼より倍以上の年を重

ねているが、正しい道を選んでいる自信はない。

経験が少ない子供なら尚更だ。ただ俺や周りの人間と違って、それを諭して導いてくれる人間が残念ながら周りにいなかった。ただそれだけの事だろう。全ての記憶を引き出した訳ではないから断言できないが、多分間違っていないと思う。

誰にも理解されないまま、今はもうどこにもいないサイガという少年に哀れみを感じながら、俺はこれからの事を考える。彼が積み上げてきた悪評はそっくりそのまま俺に引き継がれている。中身が入れ替わっても外見は変わっていないのだから当然だが、しかし余りにも面倒な話だ。

ただの始業式でここまで神経を磨り減らすとは思ってもよらなかつた。これから先を考えると、あの黒髪の先生ではないが溜め息しか出ない。

とりあえず、この学校を卒業する日までは忍耐の日々が続くだろうことは確かだ。確定された暗澹とした未来に、俺はもう一度溜め息を吐いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8982z/>

---

ポケットモンスター(憑依)

2011年12月28日05時49分発行